

佳作

危機一髪

茨城県 日立市立坂本東小学校六年 渡辺 眞生

夏休みの夕暮れ時、夏期講習を終えて帰宅する頃は、あのガラガラとした太陽もすっかり西の空へ沈みかけながら辺りをオレンジ色に染めている時刻になっていました。

それでも、日中の暑さがまだ残っていて食欲より、冷たい飲み物やかき氷が食べたい気分だったので、迎えに来た母に塾の近くにあるカフェに立ち寄ってもらえる事になり、私は大好きなかき氷が早く食べたくて胸をおどらせながら目的地に向かいました。

やっとカフェがテナントとして入っているビルの立体駐車場に到着しました。オーダーストップまであと三十分。私と母が車を駐車させて足早にエレベーターホールへと向かって歩いていった時、しゃがみ込んでいる人が見えました。そこには、仰向けに倒れている一人の老人男性と奥さんらしき老人女性、小学校低学年くらいの男の子が倒れている男性に、

「おじいちゃん、おじいちゃん。」

と大きな声で呼びかけていました。二人がパニックになってしまったように見えたので私と母は、急いで駆け寄っていき、

「どうしましたか。」

とたずねました。すると、突然めまいがすると言って倒れたからどうして良いかわからないと奥さんが気が動転している様子でした。救急車の手配もされていなかったため、私と母は慌てて救急車の依頼をしました。前にも一度熱中症の老女を助けた経験があったので、落ち着いて行動ができたのです。

奥さんから話を聞いた様子や持病の有無などを説明し終えると、男性のベルトをゆるめ、衣類のボタンを外すように消防署の方から指示があり通話をした状況で行いました。男の子は泣きじゃくり、奥さんもパニックになっている中、二年前に経験した事を思い出しながら私と母は、冷静に行動できました。でも、正直私と母は、「誰か、誰でもいいから手を貸して下さい」と叫びたかったが、通行人は一人も無く、短かいのに長く感じた時間。

しだいに私と母は、焦りの表情になっていました。遠くから救急車のサイレン音が聞こえてきました。そして立体駐車場に響き渡った時、皆が一斉に、

「きたー。」

と叫んでいました。救急隊員が降りてきて手際よく男性のバイタルチェックをし、病院に連絡を入れてくれる様子を見て、皆の表情が少し緊張から解放されたように見えました。そして、老人男性が無事に搬送されていき私と母は、ほっと胸を撫で下ろしました。

ふと時計を見るとカフェは閉店時間が過ぎてしまいました。残念ではありましたが、男性が搬送されて安心した気持ちと男の子のおじいちゃんが早く元気になってほしいと願う気持ちでいっぱいでした。この出来事は、小学校生活最後の夏休みで、私の心が大きく動いた貴重な経験となりました。

「見て見ぬふり」をする人が多くなっていると感じる時がありますが、私は「危機一髪」の出来事を忘れず歩んでいきたいです。